

末っ子のかずちゃん生まれて、すぐ、母親が死に、父親も、僕のお父ちゃんが死んだ頃、すぐ死んだ。三人姉妹で、みなし子。

兄貴と同じ歳の、末っ子娘のかずちゃんがいたはず。「かずちゃんはどうしてるやろう？」と思ったが、聞かなかった。

僕が小学校の二、三年の頃、まだ、ふうちゃんは、中学卒業したてだった。大徳寺に家があった時、電車で、場所がいいので、お母ちゃんとおばあちゃんが、もったいないと、家でお好み焼き屋をしていた。

店頭の看板娘で、ふうちゃんが住み込みで手伝っていた。お母ちゃんとおばあちゃんと三人でやっていた。

その頃の話が出て、大変なつかしく感じた。夕ごはんを一緒に食べ、にぎやかだった。

僕の兄弟は男三人で、女っ気がない。

昔は丁度、僕らの上、三人の姉の様な存在だったが、いつの間にか、長いこと会わなくなった。

その事を僕も忘れていた。ずっと一緒やったら、僕の女性に対するものの見方も今とはかなりちがう事やろう。

僕は、幹夫のマンガを読みながら、きれいになったふうちゃんの顔に、時々、目を向けた。ふうちゃんも、僕を見て、ニコニコしていた。

今とはかなりちがう事やろう